

精緻化理論を基軸とした看護学生対象「患者安全教育プログラム」の開発

Development of "Patient Safety Education Program" for Nursing Students based on Elaboration Theory

加嶋 多恵*1*2 平岡 斉士*2*3 久保田 真一郎*2*3 都竹 茂樹*2*3

Tae KASHIMA*1*2 Naoshi HIRAOKA*2*3 Shinichiro KUBOTA*2*3 Shigeki TSUZUKU*2*3

公益社団法人地域医療振興協会さいたま看護専門学校*1

熊本大学大学院 教授システム学専攻*2

熊本大学教授システム学研究センター*3

Japan Association for Development of Community Medicine Saitama Nursing School*1

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University *2

Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University*3

〈あらまし〉 医療の質の向上と安全の確保は、医療機関が最優先に取り組むべき課題の一つとして位置付けられ、看護職においても患者安全教育が重要視されている。患者の生命を守ることが最重要課題である医療現場において看護師に求められる実践力は、単なる手技的技術に留まらない「安全・確実な看護ケア」である。そこで、看護教育の喫緊の課題である看護実践能力をいかに高めるかに対処するために、看護学生の段階から患者安全を最優先とした看護実践の一連のプロセスを遂行できるようになることを目指す教育プログラムを設計した。本稿では、研究の全体計画と、プログラム設計時に3つの視点から「精緻化理論」を適用した、患者安全教育プログラムの計画について述べる。

〈キーワード〉 授業設計, 患者安全, インストラクショナルデザイン, シミュレーション, 看護教育

1. 研究背景と目的

看護教育が抱えている課題の一つに、実践力の育成がある。看護学生が卒業時に修得している実践力と臨床で求められている実践力に大きなギャップが存在しており、このギャップは、患者の安全を脅かし看護師の離職という問題の原因にもなっている。

看護基礎教育においては、従来講義で知識を学習し、演習によって技術を習得した後、臨地実習の場で知識と技術を患者に適用し体験・実施することをおして看護実践能力を育成してきた。しかし、在院日数の短縮や患者の権利と安全の確保の観点から、無資格の学生が臨床の現場で看護技術を実施することへの制約が増えており、実際に経験できる内容には限界があり、卒業時の到達目標に対して十分に経験できていない現状がある。臨床現場を取り巻く状況の変化の中、知識や技術の統合に主眼を置いた教育方法の見直しが迫られている。

このような課題に対し、看護師に求められる実践能力を育成するための教育方法としてシミュレーション教育が有効とされ、様々な取り組みや研究がなされてきた。先行研究を概観すると、これまでのシミュレーション教育は、リアリティの

ある体験や納得できるまで反復練習が可能であるなど様々な利点が報告されている一方で、目標達成は部分的にとどまっている現状がある(織井2016、森本2017)。教育効果としては、学習意欲の向上や実践能力の向上、気づきが増えられたものの、客観的指標からは明らかな効果は見られなかった報告もある(葛場・藤原2017)。学生を対象にしたシミュレーションでは、学生が実際の臨床場面をイメージするのが難しい点が共通してあげられており、学生の経験と事例のイメージ化ができるように関わる課題が示された。

そこで、看護教育の喫緊の課題である看護実践能力をいかに高めるかに対処するために、看護学生の段階から患者安全を最優先とした看護実践の一連のプロセスを遂行できるようになることを目指す教育プログラムを開発することとした。

2. 研究方法

A 看護専門学校(3年課程)の第3学年27名に実施する授業科目「臨床実践技術」および「統合実習前学習」を対象とした。教育プログラムの学習目標は「実際の臨床現場を模擬的に再現した学習環境下において、対象者や周りの環境を観察しアセスメント経験を重ね、必要な援助を安全かつ

適切な時間内に実践できるようになる」である。

3. 目標達成を実現するための理論活用の検討

プログラム設計の基軸となる理論

精緻化理論とは、チャールズ・M・ライゲルス博士により提唱されたもので、「まず学習者に課題全体を把握させるために、最も単純化された例から出発して徐々に複雑な例に系列化する手法」であり、「スキーマ理論や先行オーガナイザなどの先行研究を応用した提案」である(鈴木2006)。これにより、有意義でモチベーションの高い学習が実現され、より効果的に学習目標が達成されると述べられている。

精緻化理論の適用

本研究では、精緻化理論を主としてつぎの3点から用いてプログラム設計をすすめるところが大きな特徴である。

第1に、学習内容の系列化についての適用である。看護を実践するプロセスにおいて、看護師が患者の反応に「気づく」ことは、対象者を理解してその人に合った看護を提供するための第1歩となるが、実際に患者と接した経験が少ない看護学生にとって、患者の反応を認識することが困難な場合がある。看護学生が患者の反応に「気づく」ためには、看護学生が既に形成している「既有スキーマ」を最大限活用して、「患者が発している情報」を意味ある重要な情報と捉えて整理することが大切である。経験不足のために記憶量が少なく、不確実であると同時に、記憶をうまく引き出せない場合がある。よって、本教育プログラムでは、単純化された臨床場面の例から出発して、徐々に複雑な学習課題の事例に取り組みせることで、最初から達成感を味わう効果が期待できる。

第2に、学習内容についての適用である。とくに本研究においては、一般的な用語として用いられている「看護実践能力」の構成要素やつながりについても積極的に精緻化を志向する。

第3に、学習過程において「自己モニタリング力」を高める視点についての適用である。本教育プログラムでは、不安全行動をとりやすい「無意識」といった精緻な視点と、事故を防ぐ「意識的なチェック」といった2つの視点を用いて事象をとらえるよう、プログラムの随所で注目させる。看護学生は看護の初心者であるがゆえに、誤って「意図しないシーケンス」が発動した際、事故の発生確率が高くなる。そのため、自分の考えや行動を客観視し、危険なことをしようとしている自分の行動や判断を修正していく「自己モニタリング力」を高めることによって、個人的に実践可能なエラーを減らすための戦略となり得ると思われる。

4. 患者安全教育プログラムの設計

シミュレーションプログラムを実施する前提条件として、疾患と治療に関する知識、薬剤の知識、実践に必要な看護技術に関するテストに合格してから参加する。前提条件に満たない場合、テキストなどの参考書を参照し確認、合格するまで再度前提テストを行う。シミュレーションでは、グループ単位で学習をすすめる。学習同士がともにアセスメントし、問題解決や意思決定、評価に取り組むことができるよう学習環境を整備する。評価は、学習課題に対するルーブリック評価表を作成し、学習者、グループメンバーの観察者、教員の3者で、学習目標に沿ってどの程度知識やスキルを獲得したかを振り返り、課題を抽出し、次の改善へとつなぐ。1グループの実施は2回を計画し、1回目の終了後にリフレクション(振り返りシートを用いて、個人で振り返り、その後グループ討議、学生同士による気づきや判断を重視する)、2回目実施後にデブリーフィングを実施し、フィードバックを行う。事後調査として、後続の統合実習において、学生の行動が変化したかを実習指導教員や実習指導者など関係者からヒヤリングを行い、学習を促進するプログラムであったかを検討する。

5. 今後の予定

今後、本研究で設計した教育プログラムの導入に向け、エキスパートレビュー、形成評価を行い、指導方略を再確認した後、本プログラム運用を行う。その後、得られた結果から本プログラムの妥当性、有用性を検証していく予定である。

参考文献

- 織井優貴子(2016) 看護基礎教育におけるシミュレーション教育プログラム導入の試み. 日本シミュレーション医療教育学会雑誌 4: 54-63
- 葛場美那, 藤原正恵(2017) 我が国の看護基礎教育におけるシミュレーション教育の現状とその効果に関する文献検討, 大阪青山大学看護学ジャーナル, 1: 9-20
- 森本美智子, 山田隆子(2017) インストラショナルデザインに基づいたシミュレーション演習プログラムの学習成果と評価—看護実践を導く思考過程を促進する取り組み. 日本看護学教育学会誌, 27(2): 41-54
- 鈴木克明(2006) 「第7章自己管理学習を支える構造化技法と学習者制御」『人間情報科学とeラーニング』放送大学大学院教材